

2025年1月29日
日本社会事業大学
学長 横山彰

令和7年度文京区内大学学長懇談会
「大学における生成 AI の取扱いとその活用について」

1. はじめに

本学では、公式ホームページのお知らせとして「ChatGPT 等の生成系 AI の利用について」(2023年7月4日)を掲載し、生成系 AI の取扱いに関する基本的な考え方を示している。

その後、学生の提出レポートに見られる生成系 AI 等の利用実態やその評価をめぐり、各教育組織の構成員間で議論が行われてきた。社会福祉学部においては、教養教育委員会が1年次学生を対象に周知した「AI の使い方について」(2024年11月27日)の文書を踏まえ、2025年2月26日開催の学部教授会後の学部 FD 協議会において、教授会構成員により生成系 AI の取扱いについて意見交換が行われた。

2. 本学ホームページ「ChatGPT 等の生成系 AI の利用について」(2023年7月4日)
本表明は、以下のとおりである。

レポート・課題・論文等は、さまざまな文献・資料を探索し、それを基に論を構築することで、当該科目を能動的に深く学習・考察するためのものです。作成に際して用いた文献・資料については、考察の根拠として読み手が確認できるように、出典を示す必要があります。

ChatGPT 等の生成系 AI が生成した文章については、読み手が出典を確認できないため、考察の根拠とすることができません。原典にさかのぼって確認し、それを参考文献や引用文献として下さい。生成された文章をそのまま使用したレポート等が提出された場合、どこまでが皆さんの成果であるかが分かりません。したがって、学習・考察が十分行われたとは認められず、評価ができないことや不正行為とみなされることがあります。また、生成系 AI への質問や指示などの記載内容によっては、個人情報などの情報漏洩に繋がる心配がある点にも、注意してください。現在も進化中の技術ですので、大学も、生成系 AI の活用方法や起きうる問題について、今後も検討を続けていきます。

生成系 AI については、その出力の真偽を正しく判断し、根拠を確認し、自分の創造的活動の補助ツールとして利用されることを期待します。

以上

3. 社会福祉学部・教養教育委員会「AI の使い方について」(2024 年 11 月 27 日)

本周知文書は、「1. 考え方」、「2. 教養基礎演習での AI の使い方」、「3. AI による文章の校正・推敲」の 3 項目で構成されている。

「1. 考え方」では、上記の本学表明を引用した上で、次のように述べている。すなわち、「慎重に使えば、ChatGPT は、学生にとって、厳密に思考し、明確な文章を書くスキルを身につけるための強力なツールとなりえます。アイデアを考え抜き、複雑な概念を習得し、下書きへのフィードバックを得る手助けにもなります。しかし、ChatGPT の使い方には学習にとって逆効果となるものもあります。例えば、エッセイを自分ではなく ChatGPT に書かせることによって、練習し、スキルを向上させ、教材に取り組む機会が、学生から奪われてしまうのです。」と指摘した上で、「より良い書き手、深慮する人間になるために、広範な場で ChatGPT を使って学習に取り組む方法」を紹介している。

「2. 教養基礎演習での AI の使い方」では、AI の利用にあたっての基本的な留意点として、次のように注意を促している。すなわち、「AI に質問して参考情報を得ることは構わない。ただし、必ず**出典を調べて真偽を確かめる**。調べて得た出典が適切だったときでも、AI の出力をそのまま使うのではなく、レポートやリアクションペーパーは改めて**自分の言葉で作成する**。自分で作成した文章の校正・推敲に補助ツールとして AI を用いることは推奨する。その場合でも、AI の提案が自分の書きたいことに適合しているかを必ず確認し、**文責が自分にあることを意識する**。」と示している。

また、「3. AI による文章の校正・推敲」では、校正・推敲のプロセスを整理した上で、具体的な例文を示しつつ、複数のアプリを用いた校正・推敲の方法について丁寧に説明している。プロセスとしては、「① 校正のアプリに自分で書いた文章を入れる。② 文章に誤りの指摘がなく、AI の提案より自分の文章が適切と考えたら終了。③ 校正・推敲の提案を取捨選択する。このとき、**提案に正確な根拠があるか、自分の言いたいことに沿っているかを確認する。(重要!)**④ 選択した提案を取り入れ、自分の文章を書き直す。⑤ ①に戻る。」と示されている。

4. おわりに

本学における「生成 AI の取扱いとその活用について」の基本的な考え方は、次のように要約できる。生成 AI については、個人情報漏洩等に注意するとともに、出力内容の真偽を適切に判断し、根拠を確認するなど、慎重に活用することが求められる。これにより、生成 AI は、学生(および教職員)にとって、厳密に思考し文章化する力、アイデアを深め、複雑な概念を理解する力、ならびに実習・体験学習等の実践で得た内容を言語化する力を高める補助ツールとなりうる。また、学生の創造的な学習・活動を支援する有効な手段ともなりうる。一方で、生成 AI は現在も進化中の技術であることから、その活用のあり方や想定される課題については、今後も継続的に検討を行っていく必要がある。